

令和5年度文化芸術振興費補助金
舞台芸術等総合支援事業（共同制作支援）
事後評価書

通し 番号	1	事業分野： 舞台芸術等総合支援事業（共同制作支援）
		助成対象団体名： 公益財団法人びわ湖芸術文化財団
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>多数の人材と多額の経費を必要とするオペラの制作において、地方を含めた複数劇場で上演し、経費削減や制作技術の蓄積をはかることができ、単独では不可能な最高峰の舞台を作り上げることができた。これにより全国に創造活動のネットワークが形成され、芸術公演の地域間格差の解消にもつながった。</p> <p>ヨハン・シュトラウスⅡ世の喜歌劇『こうもり』を、大津（滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール）・東京（東京芸術劇場）・山形（やまぎん県民ホール）の3か所で上演した。主に制作をびわ湖ホール、広報を東京芸術劇場、ツアー関係をやまぎん県民ホールが担当し、連携して事業を進めた。</p> <p>3つのホールが共同して進めた広報活動により、全国的な認知度向上にもつながった。特に山形公演は、アンケートによると29%が県外来場者とのことであり、本格的なオペラを鑑賞する機会が少なかった地域や隣県の人々に感動を与え、舞台芸術鑑賞の裾野の拡大に貢献したと認められた。</p> <p>（有効性）</p> <p>今回の『こうもり』は、19世紀末の爛熟したウィーンの夜会という舞台設定を、明治初期の日本に移し替えることによって、単なる模倣を脱し、日本の様式美を融合するという卓越した発想で高い評価を得た。今後の西洋オペラ上演の可能性を示す意義深い公演であったと認められる。</p> <p>新聞・雑誌等の掲載件数は、3館で45件以上の目標が40件にとどまるなど、やや未達となったところもあったが、広報活動の強化により、幅広い層の支持を得ることができた。若手歌手が学べる機会としてカバーキャストに5名以上を起用する目標は、30代前半の若手歌手1名の起用にとどまったが、本役での起用とならなかった若手歌手を合唱として出演させた。こういった経験も将来のオペラ界を担う人材の育成につながることで期待される。また各館とも、令和6年度の事業として、制作から関わるオペラ公演等を1本以上実施することを目標としており、それぞれ達成見込みである。聴覚障害者向けには磁気ループまたは赤外線補聴システムの稼働や字幕の多言語化をはかり、外国人来場者増加に努めるなど、各館で目標どおり実行した。各館入場率については75%以上の目標を達成し、公演内容が話題を呼び、3館ともにチケット完売を実現した。</p> <p>（効率性）</p> <p>事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、適切であったと認められる。</p> <p>（創造性）</p>		

共同制作の趣旨から「初心者にもわかりやすく親しめる」作品の創造をテーマとした。指揮には四半世紀にわたり海外の歌劇場で活躍し、びわ湖ホール芸術監督で山形交響楽団常任指揮者である阪哲朗を起用し、演出に和泉流狂言師野村萬斎を迎えた。時代を明治の日本とし、場面を日本橋の質屋、鹿鳴館、刑務所（牢獄）に置き換えた。舞台進行には狂言回しに落語家の桂米團治を起用し、歌舞伎のツケ打ちの導入など、これまでにない新しい試みとなった。いわゆる単なる読み替え演出ではなく、全体の進行と音楽の流れが自然で有機的なものとなり、聴衆の理解を一層促進した。主要な役柄であるオルロフスキー公爵はカウンターテナー藤木大地が日本の公家衣裳をまとして登場し、絶妙の演技とともに大きな話題をさらった。その結果西洋のオペラと日本の様式美の両面を取り合わせたすぐれた作品となった。

（総 評）

『こうもり』という喜歌劇であったことが各地域の来場者に好感をもたれたことは幸いであった。それを前提としつつ、指揮者の阪哲朗と各地のオーケストラ、野村萬斎の予想を超えるすぐれた演出、トップレベルのキャストの歌唱力や現地合唱団などの上演に向けた真摯な取り組み、さらに舞台・音響・照明等の舞台技術関係者の努力の結果、まれに見る最良の舞台を出現させた。

共同制作の目的に沿って、現地の音楽関係者（歌手、合唱、オーケストラ）の活躍を実現できたこと、キャスト、スタッフの地域交流がはかられたこと、制作能力が向上されたこと、全国にネットワークが形成されたことが、3ホールの努力による大きな成果として認められる。